

会津新宮城跡について

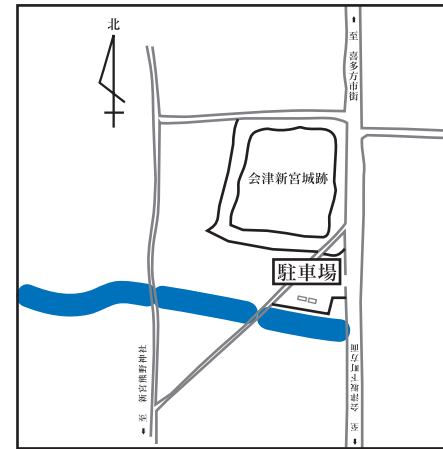
会津新宮城跡は、福島県西部、会津盆地北西部に位置しており、南北朝時代から室町時代前期に会津北部から新潟県の東蒲原郡方面に勢力を持っていた有力武士、新宮氏の城館跡です。

居城主である新宮氏は、平姓の武士で、鎌倉時代の初め頃会津に所領を与えられた関東御家人佐原義連の子孫とされます。鎌倉時代の末頃には新宮荘の地頭として土着し、長床で知られる新宮熊野神社には、新宮氏一族の寄進による銅鐘が残されています。新宮氏は、のちに戦国大名となる黒川（現会津若松市）の蘆名氏とたびたび争い、城も合戦の場になりました。新宮氏は応永22年（1415）に城を落とされ越後に逃れ、最後は永享5年（1433）に小川荘（現新潟県東蒲原郡阿賀町津川）において蘆名氏により滅ばされています。

城跡は、周囲に幅15～20mの内堀と土塁を方形（口字状）にめぐらした東西100～120m、南北120～130mの主郭と、その外側を天然の谷を利用した外堀で広く囲む外郭からなり、城跡全体では東西約480m、南北約440mの規模となります。この城跡のように、平坦な場所に方形に堀をめぐらす形態の城館跡は平地式方形居館と呼称されていますが、14世紀から15世紀前半、戦国時代以前の平地式方形居館としては東北地方でも有数の規模になります。

発掘調査では、この時期では稀な礎石建物跡や、国内最大級の方形木組遺構が見つかっています。出土遺物には中国・朝鮮産の磁器、国産の珠洲系の陶器や古瀬戸、かわらけがあり、外国産の磁器には飛鶴文の付く高麗象嵌青磁や象の青白磁など、出土事例の少ない高級奢侈品を含んでいます。かわらけは、当時の儀式などに使用されていた使い捨ての素焼きの皿類で、主郭から沢山出土しています。東北地方ではまとまった出土事例が少なく、主郭内ではかわらけを大量に使用する儀式が頻繁行われていたことがわかります。主郭内では礎石建物跡や方形木組遺構など通常の城館跡には見られない遺構もあることから、新宮氏の財力、勢力の大きさを知ることができます。また出土した陶磁器類は12世紀から15世紀前半のもので占められており、文献史料から知られる新宮城の盛衰と一致しています。

会津新宮城は、その規模や出土遺物から城の具体的な在り方がうかがえるとともに、規模が大きく全体の保存状況も極めて良好であり、文献史料からも来歴をあとづけることができ、室町前期の領主武士の姿を知ることができる貴重な遺跡です。



用語説明

かわらけ（土師質土器）：皿もしくは小碗状の素焼きの土器。灯明皿や儀式、宴会用の膳に供する食器として使用された。儀式や宴会では坏、取り皿、小分け皿などに用いられ、使い捨てにされたと考えられている。一回の使用で捨てられることから、多量に出土する場合は、それだけ多くの客を招待しての宴会、儀式を何度も行うことができる政治的地位と経済力を備えた領主の姿を想定することができる。

礎石建物（そせきたてもの）：土台石を用いた建物。通常は穴を掘って柱根を埋める掘立柱建物が多い。

関東御家人（かんとくげにん）：鎌倉幕府開設時に源頼朝率下にあった武士やその一族達で鎌倉幕府の主勢力を占めた。

佐原義連（さわらよしつら）：有力関東御家人、三浦義明の子で、三浦半島の佐原（現神奈川県横須賀市）を本拠としたため、佐原十郎義連を名乗る。頼朝が奥州平泉の藤原氏を滅ぼした奥州合戦の際の勲功により会津に所領を得たと伝え、会津地方には三浦氏や佐原氏の一族とする武士が多い。

地頭（じとう）：鎌倉幕府より、地域の軍事、裁判権とそれに伴う領地を付された役職で、地頭領主と呼ばれる。東北地方は多くの関東御家人が任命された。

領主（りょうしゅ）：中世期にあって私有の土地や支配権の及ぶ土地、いわゆる領地、所領を保持する階層で多くは武士であった。

高麗象嵌青磁（こうらいぞうがんせいじ）：器面に陰刻で図柄を描き、そこに黒褐色や白色の土を埋め込んで焼いた青磁。14世紀代を中心に朝鮮半島で生産された。